

(第11回歴史談話会資料)

備後宮氏に就いて(一)

資料

宮氏の出自

①品治国造末裔説

(大田亮氏姓氏家系大辞典)

②吉備公(吉備真備)子孫説

『西備名区』巻四十四

「(宮氏は)備州旧記に、吉備公の子孫なり。」

③清和源氏説

『備中府志』巻之二 西山城

「(前略)天文年中、久代彈正。先祖は備後国久代の城主にて宮氏也。宮は八幡太郎義家卿弟義綱男宮次郎義俊後胤也。」

「尊卑分脈」

「源頼義」

義家
義綱
義俊 宮三郎

「伝医山四王寺棟札」岡山県阿曾郡吉野町

天文元年棟札「備前臣宮上総介盛親 息宮兵庫助盛盛」

天正二年再建棟札「大檀那源朝臣大和守智盛 脇檀那

宮彈正忠盛綱」

「宮景盛壽像贊(永禄十年銘)」

「(前略)藤原姓 宮家代々胤茲姓今之肆景盛公嫡々所伝流決然矣、然所近代公之祖父高盛公之倭更於藤了為源姓(後略)」

④藤原姓小野宮実頼後胤説

「宮野州太守清豐昌澄居士(政盛)画像贊」(永正)

「天児屋根尊数世後大織冠鎌足公賜藤原姓(略)」

中古、小野宮接四海之政我贊聖化、居士以為其苗裔、古今称呼宮一字人之推賞也(略)」

「明德三年相国寺供養記」

「宮修理亮藤原滿盛 宮六郎藤原氏清」

「浄土寺文書」九〇 宮盛重注進狀

(文略)

貞和三年五月十八日 藤原盛重(裏花押)
進上 御奉行所

南北朝期の宮氏

① 桜山四郎入道

② 宮下野守兼信入道々山の活躍

③ 宮平太郎盛重 下野梅守

年表①

元弘元年九月、宮氏の一族桜山四郎入道、後醍醐天皇として備後一宮に挙兵。

同二年二月、桜山四郎入道、敗れて自殺する。

元弘三年国言、宮氏、江田和智三吉氏等共に伯耆船上山に馳参する。

建武二年十月、宮氏、尊氏の激に応ず。

康永元年正月、宮下野守兼信、南朝方の岡

部出羽守と新沖に戦う。

観應元年七月、宮兼信、高師泰に従い、石見の三隅氏を攻める。

観應二年正月、宮兼信、高師泰に従い、宮内の竜山で足利直義方の上杉朝定と戦う。
(以上太平記)

同年十月、宮盛重、上杉・畠山氏と共に、尊氏方の備後守護岩松頼宿を勝戸城に攻める。(関関録ハ)

同年十月、足利直義方の宮盛重、上杉五郎と共に味方を救援するため備中に出陣する。

文和四年五月十九日、足利尊氏義詮、京都の宮入道(兼信)の宿舎を訪れる。

(賢俊傳正日記)

貞治元年 足利直冬、宮入道父子のこもる處
寿山城を攻撃する。

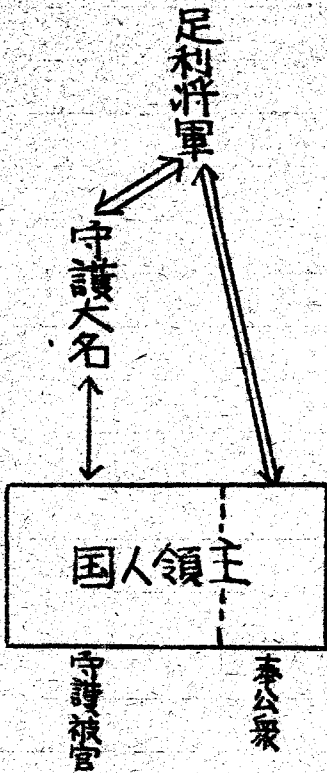
貞治二年九月、足利直冬、宮氏に敗れ石見
に逃走する。(太平記)

貞治三年九月頃 宮下野入道兼信、備中国守
護職として活動。

室町期の宮氏

一その特徴

① 將軍奉公衆となつた者が多い。



④ 奉公衆は段銭京洛、守護便不入の特権を
將軍から与へられていた。

「文中年中御番帳」抜すい

一番 宮孫左市尉 在国衆宮左市大夫

四番 宮三河入道、宮彦次郎、在国衆宮

上野介 五番 宮三郎 宮五郎左市尉 在

国衆 宮下野守

「康正二年造内裏段銭并国役引付」

十貫文 宮下野守殿 備後國之段銭。

二十貫文 宮上野介殿 備後國所々七ヶ所段銭。

十貫文 宮下野守殿 備後國之内段銭。

五貫文 宮式部丞殿 備後國段銭。

二貫文 宮彦次郎殿 備後國內三ヶ所段銭。

一貫文 宮彦三郎殿 備後國內段銭。

一貫文 宮五郎左市尉 備後國神石郡高光郷段銭。

五貫文 宮下総殿 備後國之内段銭。

『陰涼軒日録』長享三年六月分

(政盛)

「宮修理亮受領為下禁寺以金覆輪御礼白大館殿(政重)番子也故被白次大館話云奉公者莫過中系其次者宮、陶山、小早川等是也云々」

●系圖①『上州家』(田試案)

宮兼信

氏信

次郎左衛門尉上野介 勝源因公禪定市
康永六年壬寅吉卒

滿信

次郎左衛門尉上野介入道信雄

次郎左衛門尉
又次郎
教信

氏兼

次郎右衛門尉備中守

政信

若狹守又宗兼

実信

上野介

隆信

若狹守

号備後阿宮

女 熊谷元直妻

『東海瑤花集』宮上州勝源因公禪定門三三回忌
拈香語

「細川武州公(頼之)在中州四州向屢同危事審知智勇無双。薦之鹿苑相公(略)」
(足利義滿)

『臥雲日件錄』文安五年正月十三日

「李照族氏乃備后宮也。李照曰、族祖在等持院實篁院殿代、特存忠節、而勲功居多、由是賜備中国、先是實篁院殿、有周防備中国國內、必可令守護之書、于今家藏為珍也(略)」

『東寺百合文書』工27、32

「東寺雜掌賴憲申、備中国新見庄領家職事、訴狀如件、多治部備中守師景鑑妨云々早退彼輩任先例全雜掌所務(略)請取不可有緩急之狀依仰敕達如件」

貞治三年九月十四日 左近將監(花押)

宮下野入道殿

(兼信)

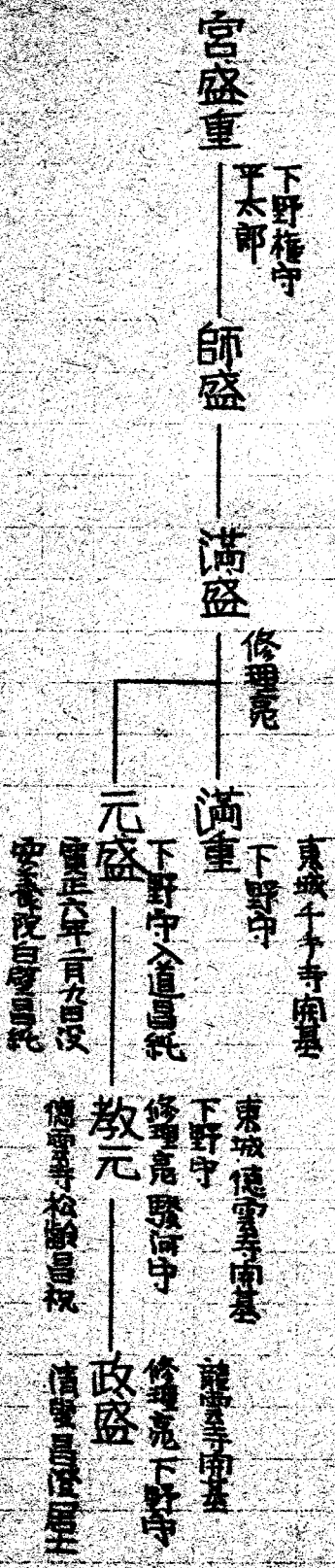
山内首藤家文書 八三号

宮次郎右所尉氏兼申、備後国石成庄下村
同門田、山野郷内江谷比多野并服部郷、同
永末事申、宮下野入道相共、止舎兄満信妨
可致沙汰居氏兼代於下地之由、所被仰下
也仍執達如件

応永十五年十月十五日 沙弥(花押)

山内四郎次郎殿

系図②(野州家)「田口作」



閑閑録 一六六

備後国中条庄之内時岡村内沢国名下作供加
先給相計之者也仍如件
大永五閏十月十五日 実信(花押)

永末三郎左所尉殿

福山志料四所収文書

今度合戰之處、如所存打勝候向御祈念
之至恐悅存候、仍而東條之内宇計原村進
候(略) 恐惶敬白

極月廿七日 下野守盛重

謹上 侍者御中

中興寺領事

東条内宇計原村

西条森村内田畠

山野村内大原石田畠

戸守郷内正作分 田三六段 畠六段

右在所注文如件

文和四年十月一日

師盛

山内首藤家文書四一九四号

就此面之儀一段御馳走祝着候仍未渡村事

雖公用之地候進置候委細尚右京進可申候
恐々謹言

明應五年四月十二日

政盛(花押)

山内次郎四郎

御宿所

尾多實文書

有木藤左所尉盛安跡之事、為給恩相計候
至有限御神役并諸公事等者、嚴重可致其
沙汰仍狀如件

明應五年十月十九日 政盛(花押)

有木民部丞殿

薩涼軒日錄四延徳元年八月十二日

来十三言三守之大大義也、二百匹過有二献々々了

又百三六騎有、有此内宮若狹守同下野守庶子

宗領之論有之未決、蓋此書立典處見書、以下野

守為上依之若狹守云、伐宗領之段無余義、勤

宗領役之事、于今無其隱云々、下野守云、伐家

元来伐宗領也、蓋下野守根本為宗領、中間建

上意以若狹守為宗領件々勤公義其支証等歴

系圖③ 有地宮氏

刑部少輔

隆信

元盛

民部少輔美作守

九右五而
又右五而

毛利家八ヶ国時代分限帳

100

一五八石

有地美作(元盛)

右者出雲神門郡

系圖④ 久代宮氏

宮高盛

上総介從五位

天文九年三月三日死

興盛

上総介從五位

天正七年三月二十日死

景盛

上總介 妻尼子式部大輔誠久女

慶長七年七月十九日死

智盛

彈正忠

文穆三年三月二十六日死

廣尚 左内尉

景幸——↓(萩藩寄組日野家)

日野左重

女和智元盛妻

芸藩通志 卷百十 奴可郡土官

宮彈正左衛門利吉

傳へ云、もと大和国宇多郡の

土官なりしが、明徳二年、大内義弘と、山名氏清と、

争戦の時山名に興するを以、応永六年、当国

久代村に配せらる。比田山に城を築き、左兵衛京

英、監物利成、小藤太息成、宮内少輔景行
上総前司景友、まで、六世、久代村に居る、
第七世上総介高盛、天文年中、栗村、大富
山城に移り、毛利氏に属して、当郡及び、
備中哲多郡、伯耆日野郡、出雲仁多郡、
を領す。尼子より、五千余の兵にて、攻来れ
ども、克たずといふ。同興盛、同景盛、山
内氏と戦あり、彈正忠智盛、毛利家に属
して、佐伯郡折敷畑に戦死す、左所尉広
尚まで、同城に居る、合せて十世なり、広
尚、出雲塩谷に移る、子孫今長内萩府に
ありとぞ、其初久代にありしを以、すべて
久代殿と稱す、」

年表②

永正十五年八月、宮上野介、淡川義隆方として世
羅郡赤屋に出陣する（開関録）

同十八年四月廿、宮政盛、柏村固屋口に戦う。

（同）

永七年八月、宮下野守、尼子経久に従い、三谷郡
和智に於て大内、毛利の軍と戦う（大内義隆記）

天文三年十月、龜寿山城宮氏大内氏に降る。

天文六年十月、本願寺証如上人、宮氏一族に音物を
する（天文日記）。

天文十七年五月日、宮次郎左所尉、大内氏により
その居城を攻め落される（毛利家文書）

天文二十年七月二十三日、毛利元就、宮光音の籠
る志川滝山城を攻め落す。

天文二十二年三月、久代宮氏、毛利氏に服属する。

天正十九年、有地宮氏、久代宮氏は出雲へ、宮
瀬兵尉は石見へ、毛利氏によつて移封される。

（昭和五十八年十月二〇日田口義之記）

①

一五二 太平記三 笠置軍事付陶山小見山夜討事

去程ニ主上笠置ニ御坐有テ、近國ノ官軍付隨奉ル由、京都へ聞

へケレバ、(中略) 九月一日六波羅ノ兩檢斷、槽谷三郎宗秋、

隅田次郎左衛門、五百餘騎ニテ宇治ノ平等院へ打出テ、軍勢ノ

着到ヲ着ルニ、催促ヲモ不待、諸國ノ軍勢夜盡引モ不切馳集

テ十萬餘騎ニ及ベリ、既ニ明日二日已刻ニ押寄テ、矢合可有

(中略)

カウテ日數ヲ經ケル處ニ、(元弘元年九月) 同月十一日、河内ノ國ヨリ早馬ヲ立

テ、「楠兵衛正成ト云者、御所方ニ成テ旗ヲ舉ル間、近邊ノ者

共、志アルハ同心シ、志ナキハ東西ニ逃隱ル、則國中ノ民屋ヲ

追捕シテ、兵糧ノ爲ニ運取、己ガ館ノ上ナル赤坂山ニ城郭ヲ構

へ、其勢五百騎ニテ楯籠リ候、御退治延引セバ、事御難義ニ及

候ナン、急ギ御勢ヲ可被向、「トゾ告申ケル、是ヲコソ珍事ナ

リト騒グ處ニ、又同十三日ノ晩景ニ、備後ノ國ヨリ早馬到來シ

テ、「櫻山四郎入道、同一族等御所方ニ參テ旗ヲ揚、當國ノ一宮

ヲ城郭トシテ楯籠ル間、近國ノ逆徒等少々馳加テ、其勢既七百

餘騎、國中ヲ打廢、剩他國へ打越ント企テ候、夜ヲ日ニ繼テ討

手ヲ不被下候ハ、御大事出來ヌト覺候、御油斷不可有、

トゾ告タリケル、前ニハ笠置ノ城強シテ、國々ノ大勢日夜責レ

ドモ未落、後ニハ又楠・櫻山ノ逆徒大ニ起テ、使者日々ニ急ヲ

告、南蠻西戎ハ已ニ亂ヌ、東夷北狄モ又如何アランスラント、

六波羅ノ北方駿河守、安キ心モ無リケレバ、日々ニ早馬ヲ打セ

テ東國勢ヲ被乞ケル、相摸入道大ニ驚テ、「サラバヤガテ討

手ヲ差上セヨ、「トテ、一門他家宗徒ノ人々六十三人迄ゾ被催

②

一五三 太平記三 櫻山自害事

去程ニ櫻山四郎入道ハ、備後國半國許打順ヘテ、備中ヘヤ越マ

シ、安藝ヲヤ退治セマシト案ジケル處ニ、笠置城モ落サセ給ヒ、

楠モ自害シタリト聞ヘケレバ、一旦ノ付勢ハ皆落失ヌ、今ハ身

ヲ難ヌ一族、年來ノ若黨二十餘人ゾ殘リケル、此比コソアレ、

其昔ハ武家權ヲ執テ、四海九州ノ内尺地モ不殘ケレバ、親キ

者モ隱シ得ズ、疎ハマシテ不被遇、人手ニ懸リテ戸ヲ曝サン

ヨリハトテ、當國ノ一宮へ參リ、八歳ニ成ケル最愛ノ子ト、二

十七ニ成ケル年來ノ女房トヲ刺殺テ、社壇ニ火ヲカケ、己ガ身

モ腹掻切テ、一族若黨二十三人皆灰燼ト成テ失ニケリ、

御所コソ多カルニ、應社壇ニ火ヲ懸燒死ケル櫻山ガ所存ヲ如

何ニト尋ルニ、此入道當社ニ首ヲ傾テ、年久カリケルガ、社頭

ノ餘リニ破損シタル事ヲ歎テ、造營シ奉ラント云大願ヲ發シ

ケルガ、事大營ナレバ、志ノミ有テ力ナシ、今度ノ謀叛ニ與力

シケルモ、專此大願ヲ遂ンガ爲ナリケリ、サレドモ神非禮ヲ享

給ハザリケルニヤ、所願空シテ打死セントシケルガ、我等此社

ヲ燒拂タラバ、公家武家共ニ止ム事ヲ不得シテ如何様造營ノ

沙汰可有、其身ハ縱ヒ奈落ノ底ニ墮ニストモ、此願ヲダニ成

就シナバ悲ムベキニ非ズト、勇猛ノ心ヲ發テ、社頭ニテハ燒死

ニケル也、佛垂迹和光ノ悲願ヲ思ヘバ、順逆ノ二縁、何レモ濟

度利生ノ方便ナレバ、今生ノ逆罪ヲ翻シテ當來ノ值遇トヤ成

③

太平記七 船上合戦事

主上（南無）隱岐國ヨリ遷幸成テ、船上ニ御座有ト聞ヘシカバ、國々ノ兵共ノ馳參ル事引モ不切、先一番ニ出雲ノ守護鹽谷判官高貞、富士名判官ト打連、千餘騎ニテ馳參ル、其後淺山二郎八百餘騎、金持ノ一黨三百餘騎、大山衆徒七百餘騎、都テ出雲・伯耆・因幡・三箇國ノ間ニ、弓矢ニ携ル程ノ武士共ノ參ラス者ハ無リケリ、是ノミナラス、石見國ニハ澤・三角ノ一族、安藝國ニ熊谷・小早河、美作國ニハ菅家ノ一族、江見方賀・澁谷・南三郷、備後國ニ江田・廣澤・宮・三吉、備中ニ新見・成合・那須・三村・小坂・河村・庄・眞壁、備前ニ今木・大富・太郎幸範、和田備後二郎範長・知間二郎親經・藤井・射越五郎左衛門範貞・小嶋・中吉・美濃權介・和氣彌次郎季經・石生彦三郎、此外四國九州ノ兵マデモ聞傳々々、我前ニト馳參リケル間、其勢舟上山ニ居餘リテ、四方ノ麓二三里ハ、木ノ下、草ノ陰マデモ、人ナラズト云所ハ無リケリ、

④

太平記三八 諸國宮方蜂起事付越中軍事

備後ヘハ、富田判官秀貞ガ子息彈正少弼直貞八百餘騎、出雲ヨリ直ニ國中ヘ打出タルニ、江田・廣澤・三吉ノ一族馳著ケル間、無程二千餘騎ニ成ニケリ、富田其勢ヲ并テ、宮下野入道（南無）ガ城ヲ攻ントスル處ニ、石見國ヨリ足利左兵衛佐直冬、五百騎許ニテ富田ニ力ヲ合戦ト、備後ノ宮内ヘ被出タリケルガ、禪僧ヲ一人、宮下野入道ノ許ヘ使ニ立テ被仰ケルハ、「天下ノ事時刻到來シテ、諸國ノ武士大略御方ニ志ヲ通ズル處ニ、其方ヨリ會承ル旨ナキ間ニ、進テ使者ヲ以テ申也、天下ニ人多トイヘ共、別シテ愚思奉ル志深シ、今若御方ニ參ジテ忠ヲ被致候ハ、

關所分已下ノ事ニ於テハ每事所望ニ可隨」トノ宣ヒ遣レケル、宮入道道山先城ヘ使者ノ僧ヲ呼入テ點心ヲ調、禮儀ヲ厚シテ對面アレバ、使者ノ僧今ハカウト嬉シク思フ處ニ、彼禪門道山、僧ニ向テ申ケルハ、「天下ニ一人モ宮方ト云人ナク成テ、佐殿モ無邊方ニ成セ給ヒタラン時、サリトテハ憑ゾト承ラバ、若憑レ進スル事モヤ候ハンスラン、今時近國ノ者共多ク佐殿ニ參リテ、勢付セ給フ間、當國ニ陣ヲ召レテ參レト承ランニ於テハ、エコソ參リ候マジケレ、惡シ其儀ナラバ討テ進セヨトテ、御勢ヲ向ラレバ、尸ハ縱御陣ノ前ニ曝サル共、魂ハ猶將軍ノ御方ニ止テ、怨ヲ泉下ニ報ゼン事ヲ計ヒ候ベシ、抑加樣ノ使ナドニハ御内外様ヲ不云、可然武士ヲコソ立ラル、事ニテ候ニ、僧體ニテ使節ニ立セ給フ條、難心得コソ覺テ候ヘ、文殊ノ佛ノ御使ニテ維摩ノ室ニ入り、玄奘ノ大般若ヲ渡サントテ流沙ノ難ヲ凌シニハ樣替リテ、是ハ無慚無愧道心ノ御舉動ニテ候ヘバ、僧聖リトハ申マジ、御頸ヲ懸テ路頭ニ懸度候ヘ共、今度許ハ以別儀ユルシ申也、向後懸ル使ヲシテ生テ歸ルベシトナ覺シソ、御分誠ニ僧ナラバ斯ル不思議ノ事ヲバヨモシ給ハジ、只此城ノ案内見ソ爲ニ、夜討ノ手引シツベキ人ガ、貌ヲ禪僧ニ作立ラレテゾ、是ヘハヲハシタルラン、ヤ、若黨共此僧連テ城ノ有樣能々見セテ後、木戸ヨリ外ヘ追出シ奉レ、」トテ、後ノ障子ヲ荒ラカニ引立テ内ヘ入レバ、使者ノ僧今ヤ失ハル、ト肝心モ身ニソハデ、還々逃テ歸リケル、「此使歸ラバ佐殿定テ寄セ給ハンスラン、先ズル時ハ人ヲ制スルニ利アリトテ、逆寄ニ寄テ追散セ、」トテ、子息下野次郎氏信ニ五百餘騎ヲ差副、佐殿ノ陣ヲ取テ御坐宮内ヘ押寄せ、懸立々々責ケル

ニ、佐殿ノ大勢共、立足モナク打負テ、散々ニ皆成ニケレバ、宮田モ是ニカラ落シテ、己ガ本國ヘソ歸リニケル、直冬朝臣、宮入道ト合戦ヲスル事其數ヲ不知、然共、直冬一度モ未打勝給ヒタル事ナケレバ、無二甲斐ト思フ者ヤシタリケン、落書ノ哥ヲ札ニ書テ、道ノ歧ニゾ立タリケル、

直冬ハイカナル神ノ罰ニテカ宮ニハサノミ怖テ逃ラン

侍大將ト聞ヘシ森備中守モ、佐殿ヨリ前ニ逃タリト披露有ケレバ、高札ノ奥ニ、

櫓ノ葉ノユルギノ森ニイル驚ハ深山^{深山}下風^{下風}ニ音ヲヤ鳴ラン

⑤

陰徳太平記上

卷第九

備後國宮城合戦事

毛利右馬頭元就は、武田出奔して後、彼の幕下の者共多く隨逐せしかば、藝州大半味方と成つて、武威日の昇るが如く月の恆なるが如く、日を逐ひ月を重ねて赫奕たれば、彌時の勢ひに乗つて備後國を切從へんと數日の廟算事畢り、先づ宮の下野入道が籠りたりける宮の城を攻めんとて熊谷伊豆守信直、天野紀伊守隆重、香川左衛門尉光景、合弟淡路守元忠已下二千餘騎、天文三年二月上旬に、吉田の城を立ちて、備後國へ發向し給ふ、宮下野入道はさる有功の士也ければ、敵の多なるをも事共せず、虛實時に出て進退機に應じて戦ひければ、急々に攻め取りがたく見えし所に、入道俄かに風病に由つて死去しぬ、嫡子若狹守は未だ弱年なりければ、當城よも堪へじと思ふ所に、家の子丹下の一族志を一致にして防禦の行を盡しける故、容易く陷るゝ事能はず、同七月三日元就城の麓へ押し寄せ、近邊の在家ども放火して、薄暮に及んで引き退き給ふ所に、丹下與兵衛五百騎計り打つて出でひたりと後を付け來れり、日は黄昏になりぬ、所は無案内也、若し夜に入りなば、寄手引きかねなんと見る所に、香川左衛門尉光景、同舍弟元忠後殿して退きけるを、敵手滋く付けたければ、元忠取つて返し、丹下と渡合ひ突合ふを見て、光景も返して助け來りけるに、

先に引きたりし熊谷も返し來ける間、丹下叶はじと思ひけん堀と引いて去りにけり、藝州勢も一二町追返して、其より引退き、駒を靜に歩ませければ、丹下も慕來らず、總軍心

易く打入れけり、其後丹下二百三百にて度々打出で、足輕追合しけるに、近國に鳴渡りたる大方の剛の者なれば、敵敢て近付かず、然る間丹下敵を方便んが爲に、動すれば手負ひたる眞似をして、或は倒れ伏し、又は片膝を折りて太刀を杖に突きたとしけるを、誠ぞと心得、敵近付けば、待受け岸破と起上りて切伏せける事、數箇度に及びぬ、又或時丹下、奇手の打出でたるに下し合せ、足輕追合しけるに、甲裳を後へ裏かく許り射られて、手負ひたるを、味方は無きか、助け來れと呼はりけれども、又例の方便事也と思ひければ、敢て助くる味方無かりけり、莖州勢丹下が誠に手負ひたると看濟したれば、數十人落合ひ、終にそこにて討取りけり、丹下驪山に燧を擧ぐる例を知らずして、討たれけるこそ無慚なれ、かゝれば城中以ての外に弱り、宵を脱いで降旗を建てける間、頓て城を請取り、軍卒多く差しこめ、同十月中旬に元就歸馬を催さる、此勢に恐怖して、備後の國人等幕下に屬する者多かりけり、

⑥

陰謀太平記上

卷第十九

備後國志川瀧山落城之事

備後國外郡の志川瀧山の城攻めらるべしとて、同二十年七月毛利右馬頭元就、同嫡子備中守隆元、吉川治部少輔元春、小早川左衛門佐隆景父子四人、三千八百餘騎にて彼の表へ打出で給ひ、同廿三日諸手一時に攻め上る、城主宮の入道光音は聞ゆる大功の者なりければ、從者何れも勇士共にて、多勢を肩ともせず、僅三百八十騎を東西に分ち、南北を助け、敵勢をれば打つて出で、強ければ引いて入り、強柔を相兼ね奇正時を以て戦ひける故、吉田勢に坂新五左衛門、遠藤左京亮など手を負ひ、吉川勢に今田七野介經高、吉川左近大夫、平佐右衛門大夫、柏村四郎右衛門、十川孫太郎、綿貫又七郎、樋口彦六、相良又五郎、綿貫助次郎、河村與次郎、樋口三郎兵衛、栗屋左京亮、石山新四郎、已上十九人、小早川勢に兼久又六、谷權兵衛等八人矢疵鎗疵蒙りけり、され共諸勢些も臆せず、手負を踏越え乗超え、呼き叫んで攻め入りける間、城中さすが小勢なれば諸手一度に勞れて、一方破るゝや否や四方共に崩れて落ち行さける故、光音も今はせん方く、諸手より竊に落ちて、備中國に暫く蟄居して居たりける。

出雲

伯耆

備

安芸

多賀山

丹那山城

山内首藤

比和

宮久代

西城

江田

和知

田後

杉原物

宮

三右衛門領家

三波

三右衛門

三右衛門

新田

新田

新田

三右衛門

三右衛門

三右衛門

甲山

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

三右衛門

凡例

山名	旧国境 現市町村名
守護家	
有力國人領主	
中規模國人領主	
小國人・地侍	

(注) 上記國人領主分類の目安(所収規模で)

有力國人領主	現行政区分の町規模以上
中規模	旧村規模で3〜5ヶ村
小國人領主	旧村一ヶ村前後



室町・備後の国人領主

此圖は戦国時代の備前・備後の国人領主の分布を示すものである。